

主の臨在による平安

詩篇139篇7、12節

わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます。(8)

7節から12節の部分で、詩人は神の遍在について語ります。すなわち、神は特定の場所に制限されることなくどこにでもおられる方であるということです。

神の遍在と聞くと、世界のありとあらゆるものを神としてしまう汎神論を混同しそうになります。聖書の神は、被造物とは明確に一線を画した絶対他者としておられます。その神の遍在を語るのに、詩人は自分との関わりの中でそのことを語ります。「わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます」。自分がどこへ行くこうとしても、神の前から離れることは決してできません。かえって、人間の愚かさは、この神から逃げだそうとすることです。けれども主は、どこまでもわたしたちを追いかけて行かれます。詩人はそのことを嫌がっているわけではありません。かえってそこに大きな慰めと平安を見出します。わたしたちが神に見捨てられたかのように感じる時も、そこにも主はおられる！と詩人は語ります。この約束を信じる者たちは、たとえどのような状況に置かれたとしても絶望することはありません。

皆さんは今、どのようなところに置かれているでしょうか。「ここにも主がおられる」と信じて平安を得ようではありませんか。